



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

4. モモ台木「ひだ国府紅しだれ」実生苗の安定生産のための発芽・育苗方法

[要約]

「ひだ国府紅しだれ」は、果実を採取直後に果肉を取り除いて核を割り、中の種子を圃場に直播きすると、8割以上の高い発芽率を示す。播種前に、肥効調節型肥料（LPコート）を40～60kg/10a施用すると、追肥せずに接ぎ木に適した大きさの実生苗が生産できる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話 086-955-0276

[分類] 技術

[背景・ねらい]

モモ台木「ひだ国府紅しだれ」は、凍害による障害の発生を抑制する特性があり、県内への普及が期待される。しかし、本品種は、慣行台木の「おはつもも」や「筑波5号」と比べて、種子の発芽率が低く、また発芽後も生育が緩慢であるため定期的な追肥が必要になる。そこで、実用的な発芽方法を開発するとともに、省力的な肥培管理方法を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 9月中旬～10月上旬に成熟した「ひだ国府紅しだれ」の果実から果肉を取り除き、さらに核を割り、中から種子を取り出して圃場に直播き（除核取播き処理）すると、慣行台木の「おはつもも」と同程度の発芽率が得られる（図1）。
2. 播種前の10月中旬～下旬に、LPコートS40とLPコートS80を1：1で混和して40～60kg/10a施用すると、施肥窒素の肥効が発芽（3月下旬）前の1月頃から始まり、生育量が増加する6月頃から増大する（図2）。その結果、追肥を行うことなく、接ぎ木に適した大きさと考えられる幹径8～14mmの実生苗が8割以上生産できる（図3）。
3. 種子当たりの成苗生産率は、「おはつもも」と同程度である（表1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 種子は、万力などを用いて核を割って取り出す。
2. 栽植間隔が畝間1m、株間13cm、2条植え（15,384株/10a）としたときの施肥量である。
3. 施肥量を40～60kg/10aとすると、追肥を行うことなく、幹径の太い実生苗が生産できるが、生育が過剰となる恐れがある場合は、施肥量を減らし、生育に応じて追肥する方法が有効である。
4. 実生苗の中には他家受粉した種子由来で、地上部が枝垂れない個体が混じることがある。この苗は、「ひだ国府紅しだれ」台木の特性を示さないため、判別でき次第除去する。
5. 主枝の伸長に合わせて、地際から40～50cm程度の高さまで副梢をせん除すると幹径の肥大には影響がなく、除草剤の散布作業等の妨げとならない。
6. 本品種は、岐阜県と利用許諾契約を結んだ苗木業者が生産、販売できる。



[具体的データ]

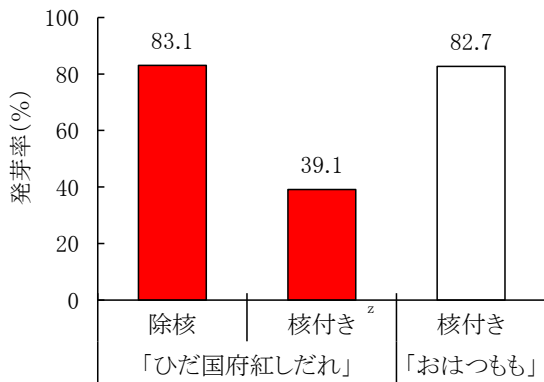


図1 除核取り播きした「ひだ国府紅しだれ」種子の発芽率

^z 農業研究所圃場における平成 26～29 年の4か年の平均

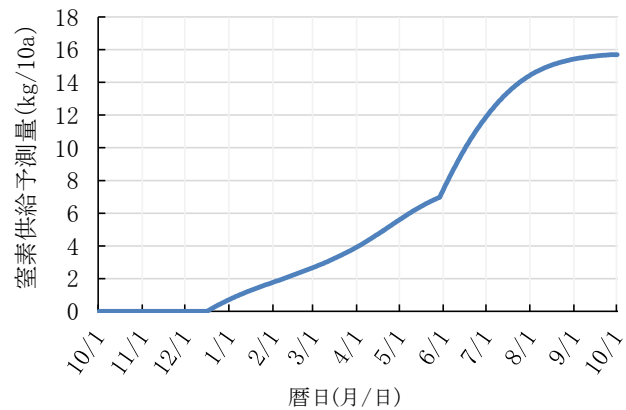


図2 肥効調節型肥料の窒素供給予測^z

^z LPコートS40 とLPコートS80 を1:1で混合し、10月下旬に 40kg/10a 施用した場合の予測(岡山県土壌施肥管理システムより作成)

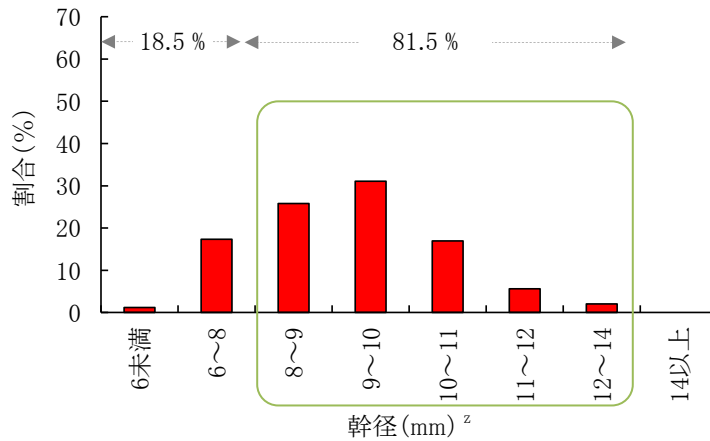


図3 除核取り播き処理と肥効調節型肥料を用いた肥培管理方法^yを組み合わせた育苗管理方法が「ひだ国府紅しだれ」実生苗の幹径に及ぼす影響

^z 枠内は、接ぎ木に適した幹径8～14mmの範囲を示す

^y LPコートS40とLPコートS80を1:1で混合し、10月26日に40kg/10a施用

^x 現地の水田転作園で実施

表1 除核取り播き処理と肥効調節型肥料を用いた肥培管理方法を組み合わせた育苗方法が「ひだ国府紅しだれ」の種子当たりの成苗生産率に及ぼす影響

品種名	育苗方法		種子当たりの成苗生産率 ^z (%)
	発芽処理	肥培管理	
「ひだ国府紅しだれ」	除核取り播き	肥効調節型肥料	56.8
「おはつもも」	核のまま直播	慣行	61.6

^z 種子当たりの成苗生産率は、種子発芽率×圃場生存率×成苗率(幹径8～14mmの割合)として算出

[その他]

研究課題名：耐凍性台木品種「ひだ国府紅しだれ」台モモ苗木の省力安定生産技術の開発
 予算区分：県単

研究期間：2016～2017年度

研究担当者：荒木有朋、藤井雄一郎、樋野友之、鶴木悠治郎

関連情報等：1) [平成 28 年度試験研究主要成果、17-18](#)

2) [平成 28 年度試験研究主要成果、19-20](#)